

俟斤は既に官號として唐書突厥傳に見え、「大臣曰……俟斤」と記さる。Hirth氏は之を *i-kin* と讀み突厥の官號中、從來知られたるものの中には此の語に相當するもの無ければ、思ふに順序數詞の *äkin* (第二) を寫したるものなるべく、可汗の下に在りて小部を支配したもの、即ち *Secundus ad principatum* の意ならんと見たれど (Nachworte zur Inschrift des Tonjukuk, S. 112) 余は寧ろ之を以て突厥碑文に見ゆる官號 *Irkin* (Rad. Altt. Inschr. S. 224. 氏は *ärkin* と讀みたれど、實は *Irkin* にして、略せられたる語頭の母音は *i* なるべきこと漢字にて頡斤、乙斤等と記せるによりて疑ふ可らず) 及び *Rashid-eddin* の回鶻の開國傳説を記する所に *kül-irkin* と見ゆる *irkin* に當てんとす。此の語は頡斤、乙斤等の文字を以て寫されたれど、然も俟斤は俟利斤の略か、若しくは利字の脱したるものと見るを得べく、かゝる例は突厥の官號として隋書突厥傳に記せる俟利發 (*iltäbär*) を、同書の西突厥傳には俟發と記せるに於ても認むるを得、トルコ語を漢字にて寫す場合に、母音の次にある *r* を略することは屢々存する例にして、王延徳の高昌行紀には回鶻の *Arslan Khan* (即ち獅子王の義) を阿斯蘭汗と記し、遼史には高昌回鶻を阿薩蘭回鶻 (*Arslan uigur*) と記せるが如し、思ふに母音の次に存せる *r* の音は甚だ軽く發音せられたれば、漢字にて寫す時には遂に之を記さざるに至りしものなるべし。

* *Bretschneider, Mediaeval Researches, I, 261. Radloff, Kudatuk Bilik, I, XXVI.*

〔五〕 *Schlegel* 氏は六一六年頃に選り立てられたるものとせり、何の故なるかを知らず。

〔六〕 回鶻に初めて君長を生じたることに關しては有名なる *Rashid-eddin* の記せる傳説ありて、*Äl-iltirir* と *Köl-ärkin* (*iltirir* と *kül-irkin* と讀むを可とすべき) と註〔四〕に記せるが如し) といふ兩人を立てたること記さるれど (註〔四〕*) に掲げたる書中に引かる) 之と特健俟斤とが相關するものなりや否やは固より知る可らず。

〔七〕 *Hirth* は之を突厥碑文に見える *alpagu, yilpagu.* に當るものと考へたりしが (*Nachworte, 110-112*) 其の後 *Müller* は之が *iltäbär* に相當するものなるを明らかにせり (*Uigurica II S. 94*) *Le Coq* は更に之を *ilt(ä)bär* と讀めり (*Festschrift für Vilhelm Thomsen. S. 147*) 思ふに *iltäbär* なる形を以て最も正しとすべし。

〔八〕 新唐書薛延陀傳には、此の部が東突厥の頡利可汗に附くに至りしを、貞觀二年西突厥の葉護可汗死し (二年は四年の誤